

国際研究集会の報告

小澤俊夫

一、ヨーロッパメルヒエン協会大会

この団体は、伝承的な語り手がすでに絶えた西ドイツで、現代の語り手たちが形成している研究団体である。第二項で紹介する国際口承文芸学会とは異なり、研究者だけの団体ではないが、日本にはまだ紹介されていないので、報告しておく。現在、理論面の指導には、主としてマールブルク大学・ヨーロッパ民俗学研究所のシャーロット・オーバーフェルト教授が当たっている。

年二回の大会をもち、それ以外に、各地で研究集会を開いている。今回のテーマは「メルヒエンの年令」。もちろんこれは一つの挑戦的命題であって、実際には多方面の問題にふれた。

会期は五月二十五日―二十八日、会場は西ドイツ、ヘッセン州の、ゲリムの生地ハーナウ市。その郊外にあるヴィルヘルムスバートという保養地の森の中、昔のヘッセン王の狩りの館であった。

五月二十五日、午後八時、狩りの館の劇場で、ヘッセン州の民謡に

よる歓迎会。民族衣装の男女がグリム兄弟が蒐集した民謡を含めて、合唱の形で披露した。

五月二十六日、九時―一三時、三つの講演。

一、「伝承における恒常的要素―口頭伝承はどこまで溯りうるか」 ヤン・エイヴィント・スワーン。ルント（スウェーデン）

スワーンは、地理歴史学派の手法による名著といわれる『キュービットとサイキ』の著者（この著作は目下邦訳作業中である）。今回の講演中、もつとも注目されるものだった。スワーンは、メルヒエン研究が、モティーフや話型や話型群についての正確な概念規定なしに進められているため、学問としての根拠が弱いことを批判した。そして、ヨーロッパにおけるメルヒエン研究が、中世にまでしか溯らない傾向を批判し、もつと古代まで勇敢に溯るべきではないか、との意見を披露した。

二、「口頭伝承と書承の相互作用」 ルッツ・レーリヒ。フライブルク（西ドイツ）

得意の笑話を例として、口頭伝承と、中世以来の民衆本の比較を示した。口伝えになったときの、語りの様式の変化を強調していた。

三、「バタのメルヒエンとメデアの伝説についての考察」 ハイノ・ゲールツ。アルト・メルン（西ドイツ）

古代エジプトのパピルスに記されたバタのメルヒエンを、ヨーロッパの二人兄弟話と比較しつつ分析して、少くとも三二〇〇年は溯る話であろうと結論づけた。

一五時―一八時三〇分 五分科会に別れての研究會。

一、「メルヒエンの年令決定の問題―非歴史的様式」 ライナ

一、ヴェーゼ。ゲッティンゲン（西ドイツ）

二、「魔法メルヒエンの歴史的根源」 ヴァルター・シエルフ。ペータースハウゼン（西ドイツ）

三、「奇跡物語、魔法物語の起源についての精神医学的考察」
ヴォルフデイトトリヒ・ジークムント。テルゲ（西ドイツ）。この人は、メルヒエン協会の前会長である。

四、「中世叙事詩のメルヒエン的要素」 ライナー・ヒルデブラント。マールブルク（西ドイツ）

五、「近代文学にみられる神話とメルヒエン」 ウルズラ・ハインドリヒス。ゲルゼンキルヒエン（西ドイツ）

この五分科会は、会期中を通じて毎日午後形成され、ここにあげた指導者によって講義や演習が進められた。参加者の方は、同一の分科会に留る者もあれば、多少移動した者もあったようである。

五月二十七日、九時—一三時 講演

一、「神話、神話学、脱神話」 クルト・ルードルフ。マールブルク（西ドイツ）

神話は、近代においてのみならず、古くから、常に脱神話のプロセスを経験してきた。それは、比喩化、歴史化、象徴化、合理化、心理化、実存化などの形で現われる。神話はその継続性と存在を確保するには、常に新しい解釈が必要なのである。

二、「神話的意識—カミュラの物語、アルト・ジンゲ、ブラジルク」 マルク・ミュンツェル。フランクフルト（西ドイツ）

三、「口頭伝承の変容—ジプシーと放浪民を例として」 ゲオルギア・アネット・ラーケルマン、ギーセン（西ドイツ）

東欧のジプシーでは、メルヒエンを語り継ぐことがその一族の維持のため必要だったし、現在でも必要である。そのため、現代の機械、例えばトラクターや工場などがどんどんメルヒエンの中にとり入れられている、など具体的な、興味深い講演であった。

一五時—一八時三〇分、五分科会

五月二十八日、九時—一三時 講演。

一、「日本の古い書承と口頭伝承にみられる昔話モチーフ」
小澤俊夫

古事記に記されている三輪山伝説と、昔話となっている「蛇婿入り—針糸型」をとりあげ、信仰の変化について述べた。そして、日本の昔話にあつては、ヨーロッパのメルヒエンのように、必ずしも幸福でなく終ることを、「つる女房」などを例として述べた。ヨーロッパのメルヒエンとは非常に異なるので、終了後も質問や感想が寄せられ、日本の昔話への関心の強さをうかがわせた。

二、「インドの『パンチャントラ』と、それが世界文学（メルヒエン）に対してもつ意義」 ゲルハルト・エーラーリス。マールブルク（西ドイツ）

パンチャントラの成立から説きおこしたので、その意味では興味深かったが、メルヒエンに対してもつ意義にまでは至らなかった。

三、「メルヒエン—その形式史的『真実』」 デイーター・アーレント。ギーセン（西ドイツ）

ドイツ人がよくおちいる抽象論で、メルヒエンとは全くかけ離れて、キリスト教信仰における真実とは何かという話。説教のようになり、聴衆も目くばせしあつてた。

お話し会。每晚、いくつかの部屋に別れて、お話し会が開かれた。といっても、西ドイツでは一九五〇年代に伝承的語り手は絶えたといわれている状況であるから、いわゆる現代の語り手たちのお話し会である。語り手は、フェリチタス・ベッツさん、ジークトリト・フリューさん、エーリカ・ホフマンさん、ユルゲン・ヤニング氏であった。私は、第一夜はフリューさん、第二夜はベッツさんの話を聞いた。

フリューさんは陽気なおばさん。西ドイツのフィッシャー社から出版されている「フィッシャー叢書」で、「夫を救いにくけた女」「魔女と賢い女のメルヒェン」など数冊のメルヒェン集を編んでいる人でもある。話は陽気で、身ぶりも割に大きく、人柄そのものの反映と思えた。

ベッツさんはそれとは対照的だった。話はオイゲンディーデリス社の「世界文学のメルヒェン」という大叢書に収められている「シベリアのメルヒェン」(ヤーノシユ・ギュリア編訳)から「モスの女」という長い物語(この話は小澤編『世界の民話』一ぎょうせい刊一第九巻「アジア」四十四番に全訳されている)。ベッツさんの語りは、やはり彼女の人の反映で、じつくりと、あまり身ぶりなく進められ、話の内容とあいまって、聴き手に深い感動を与えた。

この研究集会には、長らくカッセルのグリム博物館長を勤めたデーネケ博士も出席していた。日本人としては、「グリムおばさん」とよばれて(ルモンジュ著)の訳者、高野享子さん、それにメルヒェンを研究している日本人留学生が、マールブルク、ヴェルツブル

ク、ゲッティンゲンから参加していた。

最後に、ヴァルター・カーン・メルヒェン財団のことを記しておく。ヴァルター・カーン氏は旅行者である。事業に成功し、メルヒェンの価値に目ざめて、メルヒェン協会の後援者として、財団を設立した。事業としては、協会の大会への援助、メルヒェン研究者への奨励賞の授与など。昨年は病床にあるマックス・リュティに対して、見舞い金が賞という形で贈られ、今年是小生に対して、旅費の半分が賞の形で贈られた。

一 旅行者がメルヒェン研究のために財団を設立し、経済的援助をするということは、いまだ耳にしたことがない。カーン氏の見識に感服したし、日本でも同じようなことができないものかと考えた次第である。

二、国際口承文芸学会 ISFZR 第九回世界大会(ブダペスト)

本学会は五年ごとに世界大会を開催していて、今年はその九回目になる。従来、西ヨーロッパでばかり開催されていたが、今回初めて東欧圏での開催となった。それには、創立当初、西ドイツのクルト・ランゲ教授を強力に支持したハンガリーのジウラ・オルトタイ教授への温い思い出と、現在、ハンガリーの口承文芸研究において中心的役割を果たしているフィルモシユ・フォイクト博士への、学会内の信頼感が実ったのであった。

期日 六月一日ー七日

会場 ハンガリー人民共和国ブダペスト市内ブダペスト大学。

六月一日、一〇時―一八時 受付。一六時―一八時 役員会。

六月一日、一〇時―一二時 大学本部にて開会式、一四時三〇

分―一六時 全体会、一六時―一八時 A B会場に分散して分

科会、一九時―二二時 レセプション。

六月二日、九時―一〇時三〇分 分科会、一〇時四五分―一二

時一五分 理論委員会、一四時三〇分 国際口承文芸学会総会、

二〇時―二二時 民族ダンス公演(劇場)。

六月三日、九時―一二時一五分 分科会、一四時三〇分―一八

時 バラードゼミナール、二〇時―二二時 民族ダンス公演

(国立ダンス専門学校)。

六月四日、四コースに別れて国内見学バス旅行。

六月五日、九時―一二時一五分 分科会、一四時三〇分―一八

時 分科会、二〇時―二二時 伝承的語り手による語りの夕べ。

六月六日、九時―一二時一五分 分科会、一四時三〇分―一七

時三〇分 分科会、一七時三〇分―一八時 閉会式、一七時三

〇分―二三時 晩餐会(有料)。

今回の大会のメインテーマは「口承文芸と文化的アイデンティティ」である。この問題は、過去の時代についても論じうる問題であるが、特に現代における口承文芸の意義につながる問題として重要である。今回は全体として、現代における口承文芸をさまざまな角度から論じるものが多かった。

理論委員会のテーマも、「現代社会における語り」であった。理

論委員会委員(会長、副会長、運営委員)が、事前に英語で、二枚のペーパーを提出しておいた。ところが、一時間半の中で全員的口頭発表をすることはできず、結局、後日印刷して発表ということになり、口頭発表をしたのは、小生を含めて四人であった。

この発表において小生は、限られた時間ではあったが、まず現代日本における伝承的語り手の状況を報告した。生活様式の変化により、伝承的な意味での語りは消滅の一步手前であること、しかし、百話以上六百話に至るすぐれた語り手がいることなど。ついで、都会では本からおぼえるなどして、新しい語り手たちが生まれ、その運動は日本中にひろがりつつあること、これらの現代の語り手たちが伝承的語り手たちとつながり、そこから直接、多くのことを伝え聞き、学んでいることなどを話した。また、現代の語り手たちは本から話をおぼえることがほとんどなので、ことばの問題と、再話のよしあしの問題がおきていることも、合わせ報告した。

いわゆる現代の語り手たちの動きは、上述の如く西ドイツにもあり、アメリカ、カナダにもあるので、小生の報告はそれらの国からの出席者たちから、大きな反響があった。もっとも注目され、うらやましがられたのは、伝承的語り手と現代の語り手が共存し、つながりをもっている、という点であった。

理論委員会は全体会の形でおこなわれたが、発表者とテーマは次の通り。

一、ベンクト・アフ・クリントベルク(ストックホルム)「今日と昨日の伝説は同じジャンルのものか」
二、ドロータ・シモニデス(オッペルン)「ポーランドにおける現代の都市の伝説」
三、

リンダ・デク（ブルーミントン）「宗派による奇跡伝説は現代アメリカの伝説だろうか」 四、ザビーネ・ウィーカービーフォ（フライブルク）「中世の伝説と現代のハイウェイ上の物語り」 五、ドナルド・ワード（ロサンゼルス）「個人的な話と社会変化」 六、フィルモシユ・フォイクト（ブダペスト）「現代のストーリーテリング」 七、ヴェロニカ・ゲレク・カラディ（パリ）「フランスの新しいプロフェシヨナルな語り手」 八、小澤俊夫「現代日本における語り」 九、レアンダー・ベツォルト（インスブルック）「幽霊学」 一〇、ルッツ・レーリヒ（フライブルク）「ジョークと近代社会」 一一、ライムント・クヴィードラント（ベルゲン）「ノルウェーの復興運動におけるクリスチアンの思い出話」 一二、ジョヴァンニ・ブロンツイーニ（パリ）「ゲリムからカルヴィーノへ」 これらの発表は、近く、ルッツ・レーリヒ教授の手により西ドイツで出版される予定なので、詳しい内容を紹介する機会があるものと思う。

今回の大会において、分科会での研究発表の申込みは約三〇〇件にのぼるといわれた。予め提出された発表要旨は、上下二巻にまとめられるほどの量であった。しかし実際には、当日になっても出現しない放棄者と、出席していながらキャンセル申込み者が相次ぎ、実際に発表した者の数は、約半数と思われる。放棄者の理由はわからないが、後者についてはつぎのような運営上の原因があった。

A会場は開会式のあった大学本部から道一つ隔てた校舎でわかりやすかったが、B会場は、地下鉄に乗って四つ目の駅で降り、さらに歩いて到達する校舎であった。しかも、渡された案内は、市街地

図のコピーだけで、地下鉄の駅名も、駅からどう歩くのかもわからないという状態。従って、そこまで行く勇気を失ったり、行っても聴衆がごく僅かしか集らない（つまり聴衆も到達し難い）ことを知って、発表する気を失ったというわけである。国際学会を開くには、企画と運営がいかに重要かを思い知らされたケースであった。

そんな中で開かれた今回の大会の傾向はといえば、上記の現代のストーリーテリングの問題の他に、コンピュータを利用したデータ処理の試みがある。（三日の午後、分科会の一つがコンピュータ分析に当てられ、ハンガリーのガラニー・サンドールの司会で三名の発表があった。ショルバ・ユーディトとシュポール・イシュトバンは、「牛が草を食べに屋根へつれていかれる」という笑話（AT 二二一〇）を例として、データ化するためのモデルを示した。出席者も多く、質問や議論も活発におこなわれた。

今大会で目立ったもう一つの特徴は、前回及び前々回の大会でかなり盛大だった構造主義的研究の発表が少なかったことである。アメリカのアラン・ダンダスが欠席したことと関係があるとは思えないが、研究動向の変化を感じないわけにはいかなかった。

そうした中で、上記のような現代の視点と並んで多くみられたのが、メルヒェンについての美学的考察であった。大会がそれをサブテーマの一つにかかげたからではあるが、各国の発表者がこの視点をもちこんだ研究を発表していた。

参加者の面からみると、ブダペストで開催されたために、東欧圏からの参加者が多かった。ソ連のイシドール・レヴィンは、登録はしてあったものの、ついに姿を見せなかったが、チェコスロヴァキ

ア、ハンガリー、ポーランド、東ドイツなどからの参加者が多く、さまざまな接触を得ることができた。イスラエルは相変らず多く、インドからも今までになく多数が参加した。

総会は一二日に開かれ、役員の変更がおこなわれた。今回は初代会長のあとを継いで一五年間会長を勤めたラウリ・ホンコ教授（フィンランド）が勇退を表明し、副会長の中からルオマラ女史（南米及び太平洋諸島）、チストフ氏（ソ連及び東欧）、ダンダス氏（北アメリカ）、小澤（アジア）が勇退を表明した。そして候補者の推薦、選挙の結果、新役員は次のように決定した。

会長 ライムント・クヴィードラント（ノルウェイ）

副会長 ヨーロッパイローナ・ナギ女史（ハンガリー）、北米圏
ーリンダ・デク女史（アメリカ）、南米圏ーマルタ・ブラッシュ女
史（アルゼンチン）、アジア圏ーガリト・ハッサン・ロケム女史
（イスラエル）、アフリカ圏ーアーメド・アリ・モーシ（エジプト）、
無任所ーW・F・H・ニコライセン（アメリカ）

重要な物故会員として、A・デメーテル女史（ハンガリー）と、
ウエイランド・ハント（アメリカ）の名が告げられ、冥福を祈った。

次回（一九九四年）大会開催地として、インスブルック（オース
トリア）、マイソール（インド）、コペンハーゲン（デンマーク）、
アテネ（ギリシア）が立候補し、それぞれの地の代表者が状況を説
明した。投票の結果、マイソールⅡ四六票、インスブルックⅡ三五
票、アテネⅡ九票、コペンハーゲンⅡ六票で、マイソールと決定し
た。

時期は当地の気候からして一九九四年一月前半の予定とのことで

ある。

次回大会についての、総会当日の決定は以上の通りであったが、
その後、エクゼクティブ委員会（会長、副会長、エクゼクティブ委
員）において、一九九一年にインスブルックで第十回大会、一九九
四年にマイソールで第十一回大会と決定された。大会の間隔をせば
めたわけである。

今大会で初めて西欧から東欧に場をひろげたので、次回にはヨー
ロッパから外へ出ようという空気があり、その結果インドへの支持
が多くなったのであるが、一部の会員の中には、設備はともかくと
して、運営について危惧する声もあったことはたしかである。ブダ
ペスト大会の運営にかなり問題があったからである。

十二日と十三日の夜の民族ダンスは、圧倒的な迫力があり、皆大
満足だった。ハンガリー各地のダンスグループの出演で、地方によ
る違いも或る程度わかり、大変興味深かった。女性群の美しい民族
衣装には、あらゆる技法によるししゅうが施されていて、見ている
だけでも楽しかった。そのダンスは優雅で、静的で、むしろ脇役の
感があった。それに対して男性群は、黒い服に黒い長靴をつけ、は
げしいリズムと跳躍でおどりまくっていた。

長靴を手で叩きつけながらつくるリズムは、激しいシンコペーシ
ョンあり、強いアクセントありで、誠に現代的に感じられた。聞く
ところによると、ハンガリーのチャールダシュなどのダンスは、男
性が主役で、女性はむしろまわりで美しい雰囲気をつくる役だそう
である。二晩とも、その迫力に圧倒された聴衆は、いつまでも拍手
を続けた。

十五日晩の語りの夕べは、かつてリンダ・デク女史が発見した語り手たちを中心に、農民姿のお婆さん三人が語ってくれた。ことはわからなかったが、その表情とことばの抑揚で、十分楽しむことができた。

ジブシーのお爺さんも二人来て語ってくれた。このことばは、ブダベスト出身の参加者にもわからないそうだが、まるでけんかをしているような、激しい口調で、おもしろかった。

その後、カナダとアメリカの現代の語り手が語ってくれた。これまたいへん自然に、自分の調子で語っていて、すがすがしかった。

一方の話の内容は、昔話でもなく、創作童話でもなく、語り手自身のおもしろい体験をいくつかつなげたものだった。あとでその語り手にきくところによると、体験ではあるが、ストーリーとして、文章は固まっているとのことであった。日本の現代の語り手にとっでは興味深い語りであろうと思われた。

今大会の日本からの参加者は、ブダベストへの留学生とフライブルクへの留学生、それに荒木博之氏だった。

(おざわ・としお／筑波大学)